誹諧句鑒拾遺

秋

中村俊定文庫
文庫 18
660
3

誹諧句鑑拾遺　秋之部

立秋

秋乃文は白きいとを先に張の嘉　正俊

何て秋の来ることもつたえて心うら　鬼貫

涼しけれども朝乃紀ハ先に秋　尹督

あき来ぬとあるゝ事先日の出前　栗堂

秋ゝ来ハ何ちゝ日乃さめ心　涼山

氣の楽ハなりしゝ心やけき乃秋　雅郊

中村俊定文庫

秋の立居よかろ〳〵我知顔　亀仙
蛙の圓よ露志げかも也今朝乃秋　素竹
けふや秋人乃朝顔先見禁免　吐鳳
芋の葉よかろり蛞蝓も化床乃秋　、
秋の白ひさやけ〳〵早稲の風　素盈
さつけなく只秋〳〵や峯乃雲　不言
多る新免門の一葉よ事皆や何さ　四世　沾山
蟬もなのよ法師蛙ゆけさ乃あさ　笠翁
油〳〵蛍や水まろ〳〵の秋の風　空馬

初秋

きり〳〵秋や蓋屋同八氣も清る波　乾什
赤日や雲の墨流さまく落く　冠車
秋若〳〵孫ら蛙ん〳〵ゆる蝸乃内　素琴
むく鳥秋の志除れ初夕ア　著存
初秋や肌い出て出れ門納涼　一鼎
きこそろ秋乃あさ日や　僚　仙鳧
眠〳〵秋の秋なの〳〵四つきけハ　律我
初秋や大山ゆ乃裏　俗衣　木丹

一葉　桐柳

秋あてに新志ぬ一葉　寛麗
七夕の新志ぬ桐の秋を　一鼎
文月のちゝ出なり桐やなき　津富

初月

初月やむしろ小家乃ちゝ所　芭蕉
おゝてもの月の秋なり二日ゝ　呉朝

ちゝ松の青き夕月やこゝ月　寛麗
青ちゝ出なり月や秋乃二ゝ月　津富
はんこん乃二葉や三日の桂新　仏佐

七夕

舟うさもかちの葉に乗る銀河　西成
編一川かせとくせなむ星まつり　忠知
稲妻乃さゝむら雨や星を宵　蒼狐
鵲もいさゝうきけ星ちゝび　亀全

星つゆも涙よりて七箇の池と坊　素芹
夜眠まで目星は暈を張河　歴翁
糸針も乞て夜嵐けし天の川　柳尾
別れ星和のさいろもをうしてる　其禮
ゆくさつてのふ橋や紅葉の星淡新　宝馬
地あるハ水さうも新天の川　、
うゝて和合さうな姫や真へき青　素云
第拾壱書乃抄ら
七日の湯さゝひハ星ふかゝ中勢　樓川
七夕前日より大雨よ

かく降らハ共川ハ千て星まよれ　津富

聖霊祭

水施餓鬼逆縁なりと涙ふへ　維舟
さゝらあて新にむしふや灵祭　鬼貫
ちゝき魂やかへ来盆のうゝ盆会　作者
因日又えめもれゝいそゝ玉虫つり　乙由
めてゝし和拾ふて古元灵まつり　公曳
志飛玉の書給新嵐れ玉ゝ川里　寛麗

日ごろ世を捨て世をこの哀れ　二世　平砂
瓢草も駒をかさねや夏まゆ　笠斎
苔市や賓客は後よたゝぬを　宝馬
夏棚やをとこやもめ仏まつる　木丹
送り火や法の赤園有栖川　二世　左簾

盆の月

かさねをハ頭らん盆乃月　作者
物ゝ〇の命ハひとり盆後月　一茎

彼岸入陽あらせたまふ
降まつる地獄て仏盆の月　花蓋

頭

いぬのやゝ乃のかけをとり　李吟
夜服寺目盆ハ蹴ふなくもう角　亀文
物をめて為ふを有大躍　吐鳳
をとゝい俳偶師さん事忠里も　津富
サ五の蹴この為てをとゝの那　一茎
歩物ゝ乃れ頭乃ゝふ為　五陵
寄小夢目にまとゝれ頭の角　素石
をとゝ盆れ自ふをとゝ夜服寺　玉扁

燈籠

見附人もお[illegible]灯籠小屋うけ事　其角
目おわえの松や寺社揚燈籠　公叟
ふ細工に藤棚の[illegible]盆燈籠　梅壽
燈籠さえ拾子乃内や妹うまと　過橋
いろ紙の燈籠[illegible]けしまれ彩　軽舟

[illegible]別阿弥陀寺

[illegible]向うや一門えれく舟灯籠　一鐵

花火

花火[illegible]ひはまうあ小橋　維舟
春いまく秋いい誘くれ[illegible]火水　宗甫
花火〳〵金[illegible]別[illegible]と[illegible]　泉仲
[illegible]火水空に志ら[illegible]星ら[illegible]　涼山

朝顔

朝顔や文もも[illegible]浅[illegible]　西武

蕣の翌ハ見ゆるとて人ゝ　一亂

あさがほの消えぬ間ぞ秋乃日も　文雀

朝顔や蔓ゝ延て巻もよい行　素麿

朝顔や晴き後朝乃日も素顔　鳳臺

雲半ものさうりや霧も霧のうち　亀全

蕣や月ハ雲ねとも見てさやの　素琴

月ハ朝や朝顔乃色乃　寛麗

何ほ乃やひとゝの日を戦重、

あさがほや月ハ清きあハ皆弱き　千雪

朝顔やほの〳〵白き蕊ハ　徳　鬱蘭

蘭

急ものに風情ゝ蘭乃葉　素琴

葉ハ秀や心ゝ〳〵蕊の集覧　吐鳳

萩

風おもき萩ゝ風情や雨あの雫　素琴

雫ハ萩ゝ乃雫乃ゝ川　環齢

多ゝ〳〵ゝ人ゝ見ゝやゝ雨ハ　吐鳳

女郎花　吐鳳

老てもれく花ぶかりてうつろふ色　枝静

紅葉の錦ぶかりてうつろふ色をとゝなへし

芽子やなをこれ中の女郎花　都奴雅

桔梗

角菱は蒼もさ者ハ桔梗　涼山

何ぶやうハ多種の中は桔梗角

鶏頭　葉鶏頭

色ぶかなて見るや月和は鶏頭葉　文考

鶏頭やなをとゝ見ぬ紅たくましき　梅朝

色ふ非沢紅葉よ非沢紫けいたう　涼山

見れば人ふ夕日うつりて色ふ鶏頭葉　松山

色ふ鶏頭ふ紅葉ふ鶏頭葉　露水

秋乃日の陽ふ中へ黄鶏頭　素調

けいたうやかをはなてあるく　宝馬

鶏頭は葉咲にうつるとゝ陽く　素臨

瓢

山風ハ上をふく瓢乃蔓の末　万丁
夕くもやはくく垣ぬきへ　涼山

蕃椒

もきゝに其欲情しゝ唐うし　心祇
英しの味ひ如夜及たうがらし　涼山
舌ゆひもうやふもしの蕃椒

秋蟬

よかくし小町ゝ欲を秋ぬせゝ　忠幸
かゝまぬ蟬も夕アや秋乃夢　眉山
秋乃蟬なくや猶ゝ動きそめ　涼山

蜻蛉

蜻蛉乃枝ふはいうゝゝゝ秋　素磨
とんぼうの足きやふをきそ　素調

虫

むさゝびは雷も亦よし虫の音　超波
窮しぬを雪ひしく初霜や雪虫　素玉
蛩もよし虫とゆせば寂れくち　一鼎
蕣は虫放ちなく庭に夕涼の句　北平
沈虫の声つゝさえゆく月ふたせ　芝水
知り顔して水底月とも共に出　麹人

旅

虫きくや元祿ひゝ宿の徒　仙禽

蕎

そのかゝて傷よりや袖はきりくちて　太草
きりくぬ沢蟹や星をうとれ　素磨
月しろをうへもしくや年俳出　孟枝女

病中

横へまて時沢小庶ぬ死きりくを　古秋瓜

宗祇墓

蛩や白ゝ塚れ苔ろ乃ろりくを　寛麗

稲妻

いれつるやあらぬものもの出る夢下　乾什

いちはやく仕まに さらぬ相柳　横川

いなづまや雷れうたぐ乃光り堂　、

稲ぢゝや雲に吹草ぬ息ぢのひ　宗堂

いなづまやこちらぢるる紀乃青　仙禽

稲妻やひのさゝ日乃解あをめ　涼山

稲妻の毛ぢゝや拳と星乃松　、

いなぢゝや家目にうる吾をうる　寛麗

いなづまや互に掃をとる也〳〵　不言

羽ぶきありて

人乃世や只稲妻ぬ新〳〵　徳元

稲

ぬき葉ぬいぢまり〳〵稲をかつる衣　裏雀

世乃人をおもひ即うる稲ぬ来　吐風

竹の気見るうる乃稲や去　柳郊

垣結ぬ隣くや稲む〳〵　赤后

鹿警　鳴子

かくしあれど月ぞとどめぬ破れ窓　忠知
矢一筋放てまもる栗山ぶり　涼山
一本の十乃吉あるる縄　亀全
ひとり来鳴子の黄ひ知恵　宝馬

露

芋の葉のくもなきうら露の玉　文洞

夫れ露や稲ふ出ぬ落さうな　寛麗
反橋や日にきらるる清水の玉　素麗
さ月降菜ハひとと夜菜畑　五陵
葉もそふに露くれさし露の玉　菊千

霧

ひろや野ー中や雲の晴乃れ　栗堂
海とろろ岸や雲のむろ子島　涼山
島の夜も明し気雲乃沖鳥　寛麗

雲きらくや富士を一時只もの哉　宝馬

相撲

大力やたゝへはたてる角力　由平
うゝきくも小兵の徒し角力ぶ　涼山
見物に成あひをなる負角力　寛麗
艶乃うく前髪うりや徒角力　吐鳳
力をきくく扇をひや負角抵　乙佐
組うゝ乳松の連理と相抵載　麹人

八朔梅　竹春

はくゝやうふはうり賣を梅乃香　才磨
八朔へ中ゝうゝ雅と梅のくれ　京人
東八梅ふ茶を又ゝうゝ仲ゝ社表　寛之
言濃多て馬ぬ先仲乃ゝ乳　春梁

鶴

胡鶴なくや子まの病ゝうひ　涼山

嘘さへ春味ちさ朝を帰うけら　寛麗
大夢し霧けき明乃ふたらる　〃
紙中春夢語亜の鶯　この邨　素人

小雪渡

山端ふるる雪乃夢　文草
風乃吉も日くふたをて渡る　亀全
月ハ西ふ空ハ淡やふるる　津宣
夢ふる地雲れあふ乃ふる雪　長虹

雁

春ふる雁何を雲語乃夢自ふて　栗堂
厂ふるや一紫乃ふたる初霞紫　素貫
恋もせハおもふ乃ふたる雁乃夢　寛麗
年暮ふ夢ゆ新厂や乃ふれ朝　〃
ふこ乃て厂きく夜ふる初霞見　素芹
係むをハふるかへふやふ田乃厂　仙鬼
初厂や二夢ふ三ふる惜けふる　山鳥
のひきふ〜夜やふる乳厂の夢　芝水

さを屋や僧をの寄ふ古ゑ　生治
初ゝや下り風をのとゝきゑ寄　吐風
眠らて寝る寄と如ゑ屋乃寄　宝馬
さを屋や待し後をゝ山ゝ　、
一羽寄ゝ寄ゝ寄ゝ付ゝ夜乃屋　甚禮
初ゝや走はゝく月の目を休光　不言
ゝ時や蛍も目寄をゝ寄ゝ　嘉莹

鹿

風の鹿尾と乃松と寄ゝ寄ゝ利　栗堂
秋ハ分ふ走ゝく寄ゝ寄ゝ　涼山
ゑふ走ふさゝりや寄も山ゝ寄ゝ　素麗
鹿ひゝゝゝなゝてゝゝゝ牧の中　一鼎
寄時て小雨乃寄を抜ゝ夜や　素調
鹿の寄引拾宝ゝ糸くゝ庵　徳雨
鳴このけて時ゝん寄ゝ丸木橋　木舟
少ゝ思ゝいゝゝ時ゝゝ明乃後　、
寄時や猟師の寄も文松ゝふ　金露
寄なくや山ゝの里ハゝゝゝゝ　津宜

落鮎　附鮎

落田くハ折ゆ[illegible]綱乃鮎　秀昌
さひ鮎やさらそも源流の人きき　亀全

秋風

ゆ[illegible]て大根あしあるゝ風　芭蕉
他人のかさ[illegible]れ雲や秋のゆ[illegible]　涼苑
さ[illegible]と陸[illegible]ば秋の風　涼山

秋風や伊[illegible]の雲を掃
稲穂をと吉ハうゆ[illegible]の風　寛麗
夕[illegible]のあらひゆ[illegible]れ秋ぬ[illegible]　枝静
慮得

初嵐　雪分

芙[illegible]柳ハ孫[illegible]あし　寛麗
地分して国[illegible]や望絵の桔槔　嶺光
蟬やし[illegible]を陸ふや初あ[illegible]　都奴雅
蔓芋乃ひさかた[illegible]　玉巵

荻野　菅系

荻はらゝ菅ハ志のけさ夕哉　素賢
ひやゝかに小夜まて蛾しゝ菅世風　其系
法ゝぬ日の色ふかゝ菅世ゝ　素臨
日は秋乃旅を忘御ゝ志野ゝ　玉圃
花と鳴て急く野路の御雨　酉爾

芭蕉

雨山めまて色葉共くゝ　汶村
おもゝ御ゝ八りゝ沢芭蕉乃雨　栗堂
ゝ武蔵や庵ゝ御ゝ　過橋

薄　尾系

まねく也野宿せゝゝ夕尾系　亀文
秋行ゝゝ月ゝ拾ゝ系薄　冠車
むさし野や野分ゝ望ゝ　一鼎
見えゝゝ川や逸ゝ村ゝゝ　環齢

稲こきや老とも見ぬ風乃国　八分　卜人
風なくハ茶や家しきれる村もく哉　分香

敷盛墓

併乃もりく眉やもれもこぬ　才麿

蕎麦畠　新花咲

刈ぬとも物ハ残るあ花乃茎　芭蕉
撲雲やもたもく蕎麦たて　其角
新花もこや地蕎ハ久しく絞る汁　笠翁

種茄子

人間乃苦さハ和よ種なすもし　田室
ふく色もつ黄さもこ家も種茄子　律富
種茄子ちや多よ紀ゝ多ゝ果　佛外

蕈

松蕈乃常盤にもゆる山もゆ　立圃
蕈指や京と付只雪の果　素堂

松しけやかなるに三保の清
初たをやかなるに十雨の余韻
くたをるやうなる乃指功者　吐鳳
　　歴翁
　　津富

榜　烏榜

浦〻の海〻より出る榜
里ありて榜の木榜の家もれし　玖也
年年や姉うの影ゆかしかるたと　芭蕉
浦榜に清き月れき旭夕日の東　寛麗
　　風馬

梅嫌

實は嬉しかるべき梅なれど
実とならずして咲ふる梅　嫌　涼山
　　寛麗

彼岸

念仏も実乃入間に彼のひんぬ　何来
祝詞や我や彼乃彼岸八月を
雨きたふ紅葉も彼岸桜ふる　丶
　　素活

月

かさをぬぎ雨もはれぬ月　宗鑑
月乃船新や世界を大まとし　立圃
名や鏡く星こゝ数月乃大徳　徳元
ほくさ沢を宵ぬれ月や月のくもり　玄札
月毛垂ちるひ一ぱんのをねぶし　梅翁
長月もたゝ丸しナ三夜　丶
茶毛こ茶中紅葉や月のナ三夜　風虎
二夜ゝ月の月のうゝ孔帰ゝ孔　李吟

名ハ名ゝ宵ゝ月ゝ月夜　安之
見ゝさ沢を沢ゝ孔ゝ人の月夜ゝ　西崔
根乃水ぬ月ゝ月ゝ宵ゝ月夜ゝ　鬼貫
桜あまりて又ゝ月や赤沢月　来山
長舞て吾ゝ見ぬ月夜新　素堂
沢くゝも赤むくらん月乃くま　太来
名ゝや我もナ五孔津ゝ孔ゝ　笠翁
ゝ宵ゝやゝ月乃ゝ孔井や松の上　涼菟
名月やかゝれぬ井戸の赤ゝ孔　祇空
むさゝ地を見めゝ人ゝ孔ゝ月　超波

入相乃さゝ波法師よりゝ小法師　寥和

名りや五月のうらよきゝ雪の降つゝき　、

名月や雲ゝ雪の降山を　古乾什

名月や数ゝ人の年　古龍簾

名月や雲をとゝひ乃木山　冬映

雲を出て月乃うつれハ清し　潦青羊

天地もたゝ一つゝ屋し月を宵　公曳

月ハ雲と月新ハ今雪を数百盃　亀文

汐さゝひ満るや月の沖までも　亀齢

名月や裏をおゝて乃膳所の味　栗堂

盃ゝこの月を数新やけちゝ乃清き　文洞

月も新も同し一つゝ流ゝ新の川　雅郊

月乃秋や眼をさゝし乃れの光ゝ顔　寛麗

天地戸も明ゝ一つゝひゝゝ乃清き　、

見入ゝ海鼠乃峯ゝ雲の月　素貫

ゝ月ゝ同も新新古池や波ゝ清き　、

業ゝ見海地上乃雲や波乃つゝ成　、

人ゝ老を儲りて嬉し一月ゝ月ゝ　朱麿

日のゝゝ古ゝ一ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　涼山

名りゝや万山も新あゝ新　、

月小丁は李白人の九月十五夜　亀金

納涼も似て似ぬ夜也月を賞

蕃天乃下ぢ月とも庭せし月を賞　、

名月や明月のを話も青乃うち　生沾

蜻蛉も草を盗こかぬ面白月を賞　霞遊

似て似ぬ夜二月を遊ひ乃賞　自　寫里

心よく時主あるより月を賞　夜　素竹

月見ハ京ハ者らしく名所あ　吐鳳

結跏趺坐しぬいて新月を自　、

名月やとけたき杉も新をし　、

月満て名残るうぬ夜となり如　山鳥

名月や秋の千日ハ乃ひと夜　宝春

納涼なら紀ぢ名所や十三夜　二世奇峯

抱よ分て月見ハ女や抹うら　平砂

名月ハ面にうけ名へき庭も　二世賀重

月今青門ゑ振まふ酒盃うん　冬映

いはなひハ人の老を名ゆうけ　慮得

静々くも月乃都ハ戸ゑ入　李調

下紐ゑく満ゑ沖ふりあよひ　四世素陽

名月のうをゑりうを海や面　香　沾山

見ひらくや秋乃照れるの月　東盈
月ハ曉拍子ぬけ蓄を吸ふ秋乃　律富
月ハ一切我身ひさりの乃ハ望ハ又む　〃
いはよひや月も時雨の西やけき　〃
月見宿やひとりハ立く庭乃面　本丹
月照りや和室の炉を傳ふこし　帰鳳
冷しき未くれきはしやの后のり　桂我
むら雨れ稲ハらぶの乃濡月　二世左簾
十六宵ハ月のひとりの秋乃　〃

名ありや玄面乃ぬ岩陰新　笠斎
名月や夢ハ青麻の僕まても　嶺光
二見浦
眠乃ぬもはき潜乃月又ぬ　梅翁
道ハ者のあとそ
月いて一炷むなし谷乃庵
相列狭牛の寺ゆく
食堂や魚ぬれ伊ら新乃月　遠山
何ぬくふ餐せんて
船舟乃ぬをうつ元ぬれ新　徳元

船中

明石や廿七夜も三ヶ乃新　芭蕉

待宵ハ淀まぬ月や淀乃堤　柳居

放生会還幸を洛ニ

ちらくし白衣の沙供峯の月　祇空

伊勢にて月

雨あらく夫婦中の月見ぶり　淡々

名ふ恋ふや耳ぶくを雨乃月を青　栗堂

実やふくをちひ桂乃ふ雲　素后

石山の秋乃ふを和を幸待濃　玉園

仲秋蝕

嗚呼ちよもし代月ちてしやもし　津富

妻ふお行人のを人盆祭にして

昊や代を代ナ五夜を片月見　吐風

待宵

れまをぬ望ちを八先よしれ月　宝馬

代ふを陰ふ月ふ

雨ちをてをふを実ちれ乃　桂峩

須摩

ちれ月を相やりをを塗ちを　梔水

碪

搗そのハ走りし碪乃窟しをを　國字
家ハ月小明るくて我つきぬる　梅寿
庶るゝ少事ハ青よりを色し達　卜人

菓

鮒乃下葉法けるやと乃きく　其角
香も月かうくむや小き八食ハ菓　青羊

造らねハ法くを爲めゆりれ小きくを　茶仲
菓法し小兵なをもも牡丹よりを　栗堂
悠結くと人小まをせくけくや菓　仙禽
老ゝ恩咲てむくよ遊乃きく　凉山
大菓や葉も大ま小窟を拾　寛麗
皆黄菓垣ハ日法乃古根よりを　雅郊
菓乃香や法きゝくへ小秋の情　吐鳳
百菓乃百よりをれや朝くを百　素竹
今やうを咲や朝れ法くをきく　寛之
菓山布くさくや籬乃南うけ　素陽

重陽

多武峯こそ秀くめくたりや紅葉の酒　立圃
胡蝶の菓子もりてくふ乃きくく　宗瑞
かいとり菓子の菓子ひや菓重　涼山
を入せめきくあもと客や九日くふ　帰風

紅葉

山や右御あ〻き菓子重く合新　貞徳
紅葉あく又菓子をや俗ちくれ小　〃

うぶ〻し多小紅葉せてめくそ乃紅葉小　天満　由巳
雨雲や毛こちも思きいたく山　似春
菓乃紅葉や黄多ゆるあれ風　李吟
寒鳥ちやあ菓ゆかあむ名根山　来山
もこちして山を達ゑよりより　超波
ちかあれもこちも小紅く岩根の中　采仲
黄金乃下ら鳥屋や谷ちこち　亀文
森思む中に日くを乃紅葉小　栗堂
落くちあ紅あこや時雨の俗時員　文洞
ゆく紅葉猿も赤きをうくを也　赤芹

日く乃照葉ふさめ何日は見ん　眉山
紅葉せりあけの陽籬ちん孤を　素竹
深て見ん紅葉ゝ夕日くゝ　山鳥
ち冊よ一ち高ち乃山松山ちゝ　舟子
雨ゝ見ゝ照陰日や落ゝ夕ゝ　和水
秋もまゝ来ゝ物いも次落紅葉　楚夕
森も見ん紅ゝや高ん岩戸桜　徳雨
若葉よゝ老てや伊達を懐ち　慮得

はせを神渡寺に詣く
見渡せ松名ち高雄乃山ゝき　井鳳

秋　日

巷の秋や宿を立出く道奥廓　維舟
を乃秋や十三夜人間の八九月　幻札
ぢら杖をはく行んと休一老の秋　春可
秋の野ん深ひらつ入日ち　栁居
元山乃あゝ秋屋ゝ多　寛麗
温泉を秋乃ものゝ鄙乃市　恭梁
色ゝゝ秋楚横日ん魚乃店　律我
旅人の中りや日く温泉場の秋　軽舟

秋夕

夕くれや市中も山居秋乃ちら　風虎
又ちさせハ流もまハ見まハ次ケれ秋　芭蕉
秋乃くれ男ハなゝめ之のたもと　才磨
蕎の穂や雲ちりこ泊く秋湯蕾　程己
夕くれや山に西をハ先もあ知　調泉
おもふ事なき男ハ程そ秋のくれ　公曳
見やく烟りもひきの乃夕新この事　〃
姫やうれもるしふうれせ秋乃くれ　雅郎

帰て荒おくれ鳥やのよ乃くれ　寛麗
ちまとゝふ分れも秋けくれ　〃
暗り久ちはの遠ひちて秋乃蕾　〃
横日新なるまゝ小細し秋のく秋　素玉
岸に鴨舟もいくさもちりくれ　山鳥
くさ武蔵に雨ふ海寺の夕アクな　桃水
もれあまま秋法夕新ハ強くはく　律富
むてくまハ宿のもしも也秋けくれ　〃
ゑ仲もくせやくなくの秋の蕾　〃
夕くまやをまとちりもあもとを　木奴

毋衍のく答ゝ多ゝ秋のくれ　宝馬
大きくて牛八寂しかりけり　五陵

秋夜

雨戸就を秋乃ちゝや灯の影　来山
淋しやていよく秋乃夜ぶき　乙峡
暑き夜もあるとて秋世四条川　梅寿
秋の夜や庶ゝく望の光書　涼山
吉原乃灯籠もぬる月夜　柳郊

夜寒

月しろの淋しさをかこち夜寒かな　素貫
蔭芦小ぶゝゆくゝ舟乃夜ぶかい　素麿
蛩を通ゝ女ゝ夢乃夜さむうれ　寛麗
夜ぶかしや何の嵐乃ちゝふおと
生業侘ゝくゝ稽ちさむうな　木丹
庶酒ともゝ呂乃侍ゝ夜ぶかい　素元
多菴ゝ紅邸をとゝまて
数の夜も紙帳にたのむ夜ぶかい　来山

露時雨

降て長川小雨の声や寒しく亀　亀全
深あけし梢や志賀の浦波に花　鳳臺

秋雨

夕立ぬ庵くゝ小雨むや秋の夜　梅壽
降つゝも涼とゝ秋の雨々くき　素玉
雨の日乃縁色より市乃あき　柳郊

混合

風小舟寒なるハしの蓮ぶ　維舟
楚乃為もけぬハ小雨や若たゝこ　玄札
芋の葉乃岩日高ゆ毎ぶ　鬼貫
降つゝ降つゝ縄や雷小太刀乃新　支考
ゝ稲穂おと敷なりけゝ秋松負　才磨
降ゝ雨させと時さゝ　其角
萩の葉や為よゝ雨乃音　古尤簾
雷れゝ降る白しゝ音乃うゝ　黙瑟

冷麦や涼風さゆると履て入　梅朝
太刀魚で打ち落す波を踏て　亀文
月子九もや晴きれぬ空乃盃　冠車
蔦栗や塚の雲さし野まを次　栗堂
ふことをかへ島や数子旅　仙禽
き所ふ変ふ忘れてう扇さや　涼山
き梨やむけハ去日見しの色　〃
鰹見しあふハ秋ばしを触　〃
かい結しはや繻紅乃花麻の子　一鼎
丈菓ふ変ふちやめるおりてあて　順翁

秋批

釈ふ乃芋や汁岡やあたのし　水鶏
焙ともなれへきいろの柘榴の角　風馬
文ハ顔ぬのうけちさや汁迂宮　二世　平砂
う殺桔や日まにとを祢ら柘の葉　操舟
ちいさて殺あちもも也秋深蝶　宝馬
孫ふあふの又清ふ枯尾ふ　〃

七月廿四日宿大よ頃く

天も殺ふ実や伊丹の大灯籠　梅翁

本曾

うけちや命とかふむ蕎ふ　芭蕉

山ちゝ名をかうて頼母て

鶺鴒よいはぬ波よりふりさけさ　紹波

秋雜

世ハ夢ゝ二ゝ月ゆゝ高ゝ人　素貫

胡蝶やきくも信に女男ゝ　二世寛麗

立麻乃世ゝ月ゝ　左簾

新酒ゝ山やもゝちゝ思　津宜

厨婦てゝ芝居や刈田時　德雨

暮秋

見ー月や大ゝ九月　其角

夕こゝ秋の幸涛も　曲菴

苔ゆくや秋もゝ　涼山

寂歌法ゆけゝ　寛麗

引けハきくゝや秋　何来

ゆく燕や雨乃御　津富

誹諧句鑑拾遺　秋之部終

附録

秋之部

一陽丹素外

附乃かたらなてしこ秋半てと
末吐ゐとふ季とこのへてたり桐一葉
川風よ袴れのへしせかし小袖
二月星半乃角文字きらひろう
ふく庶毛半とやれん星ケ青
ものの実吐ぬくゐりなき夏と

逸犬や鶉伺の門も法乃月
却まし所女波男なるや頭のを
定ミ月ぬくゐ車やとるを乃輪
庶ゐ毛ぬ乃や躍をなさ乃夢
茶史ぬくゐ雲や今青れあるし波
梅ふ毛市ゐに中ゐ和茶史る
咲せし礼柳ゐをゐふ胡こ伺を
鶉紅や雲ゐ乃えれハ史串を
夜ア月ふ秋を庶しこう又星
ゐらしや法参ものあ和ゐ乃

町中や夜ふかしきりぎす
笛乃音ハ仙人ゆかるなを出れ音
昇れ日や音に有情れ病乃玉
朝寒や松ひ気波も面れ意
失中に立ち出れ面やかち角力
山茶や木の実ふむふ箭の音
厂時やたれ夜たちの青れ空
厂きくや其たれ居を母ハ夜ア
重ねて月時ら夜やうれ居
時明けぬ鹿乃面

口ずさをおもや月ゝ庵れ夢
撫さるふ嶺れ名ぎれ世分の角
暑ゝ月ゝ旬ひを庵をを世ぎ
夢ふ風虫ハいろゝ乃れれ世を
風雲や蹄ふ冷ゝき茶を紀
月の雪日れ雲やれ縁をけ
祈らひ夢日絵ゝやきれこ指
世ハよゝきゝや二百遠ゝを
放生舎月も光ゝをを夜や
名月ハ夢ふ風なきゝを名ゝ形

雨風のさわぎ居くし用今者
安堵しく庶幾人も所の月之青
柳ともおもふやさらしかはら新
同しものを色てハ又さハ浅の月
入ちりぬむ名殘を雲間月かをハ
落葉ハ水面乃ら秋まれ黒小神
葉小紅葉の日や茶も紅と成紅
丝水をありさし葉に赤乃流を
秋葉やうつりさけとも清くまやの
ゝ紅ゑ乃色ハ青紫の名ゆゑ

郭ひし多や楓乃清まを月袴
照も豆ゆ雨ゆ赤てこの後和葉
てゝゝや紅葉青あふ女酒を鬼
くまちあや今ゝよし神の紫の盛
秋ハ日ハ清きゆ思うち小菊やせん
泊人よ又ゆ他服ゆハ秋乃くも
冬ハ松寂しくもあるて秋ハ昏
何年と又日乃夜空ゆ
ゝ日の赤乃ゆ乃ゆな秋乃雨
物菊き風小吳見ゆ行きの函

雲林一月之人ゆくゑをてゆくや秋

行秋やさまとも紅葉深きこゝ沢

朋友の書れ分まゝ高ふ

夜アと皆きめてくやゆをうつ砧

辛都婆小町賛

胸乃内もさめむ地下ゑ月ふ風

風鈴の白を九月さく

アもちれ風吹もとゝてやちゝとゝ

附録 秋之部 終